

教育情報 No.26

Educational information

02. 別府を障がい者が活躍する文化の拠点に
NPO法人こんべいとう企画 理事長 豆塚エリ

04. 『不登校』が問いかけるもの：
社会へのメッセージを受け取る
小児科専門医・子どものこころ専門医 山口有紗

06. 子どもの心に寄り添う
～検察庁での取り組み～
大阪地方検察庁 検事 指澤慶子

08. 不登校を未然に防ぐための
取り組みと情報の共有
～包括的生徒指導の実践と校内
サポートルーム(KSR)の運営～
香川県高松市立山田中学校 校長 溝渕浩二

豆塚エリさん

NPO法人こんべいとう企画理事長

特集

子どもの心に 寄り添う

日文的 Web サイト

日文 🔍



※本冊子掲載三次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。



心が動く、その先へ。

日本文教出版



別府を障がい者が活躍する文化の拠点に

NPO 法人 こんぺいとう企画 理事長 豆塚 エリさん

誰のものでもない場所の大切さ

大分県一の進学校に入学し、将来は難関大学に進み、弁護士になるのかなど漠然とっていました。ただ、弁護士に興味があったわけではなく、今思えば、母から言われてその夢を自分でもそうだと思い込んでいたと思います。内心は本が好きで、文学部に行けたらと思っていました。自分のやりたいことがわかっていない状態でした。そこから大きな苦しみが始まります。進学校という環境で、学校の授業についていけず、もともと自分が行きたかった高校でもありませんでした。学校の先生も喜ぶし、大人からの期待に応えたいという一心でした。たぶん中学校のころから抑うつ状態だったのか周囲とうまくいかず、勉強しにくい状況で、唯一の救いが本を読むこと、自然の中

にいることでした。誰のものでもない場所が自然の中にはあり、「もう疲れたな」と思ったとき、座り込んで空をボーッと眺めることが、子どものときにはできていました。しかし高校は大分市の中心部にあり、ちょっと一息つきたいと思ってもそれができません。そ

して、追い込まれていきました。大学に行かないと生きている価値がないと思い込み、我慢することが一層増え、「大人になってもずっと続くのかな」と思ったとき、「もうこれ以上我慢できない」と思い、そこで糸が切れました。だったら死のうと……。

その後、障がいを負って、最終的には自主退学まで追い込まれました。心は軽くなったけれど、社会的には困難が増えました。

死にたい気持ちに変化が……

大けがをして入院し、重度の障がいを負ってしまいましたが、ふり返れば私にはよかったです。その後、精神科にかかることもなく、長い間リハビリ病棟にいました。心の病を突きつけられることもなく、親とも離れられ、学校とも離れられている、その中で2年近く生活ができたのは、自分の人間関係をリセットする貴重な時間となり、そこには私を受け入れてくれる人たちがいました。

もう一つ重要だったのは、病院の中には多様な人たちがいたことでした。患者の心身のケアに心

血を注ぐスタッフ、認知症で寝たきりのおばあちゃん、勉強が一番ではない人たちがたくさんいたのです。「勉強ができなくてもいいんだ」ということが、自分の中では大きな発見となりました。

弱さを見せる＝人とつながる大切な行為

自殺未遂をしたことを10年ほど隠してきました。私に変化が訪れたのは、神奈川県相模原市の障がい者施設の事件でした。事件から一年後、ふり返る番組のコメンテーターとして出演してほしいと言われ、それまでその事件の凄惨さを知らなかった私は衝撃を受けました。犯行理由が、ただ障がいがあるから刺したと。私はその犯人と年齢が近く、彼がやったことは他人に向けたけれど私は自分に向いただけで、価値観は同じだと思い、それが大きなきっかけとなり、当事者として語るということに目覚めました。

本の刊行後、自殺予防学会での講演会では、私が話すと、自分の体験をみんなの前で話してくれる方もいて、自殺の原因は居場所のなさということを知り、「私が思っていたことと一緒に」という気づきがありました。共感や理解があることで人とつながれる。だから、弱さを見せるというのは、人とつながるための大切な行為なのだ気づいたのです。



NPO 法人 こんぺいとう企画の誕生

障がい者になってみて、社会的障壁の多さに圧倒されました。学校に行けない、就職できない、10年ぐらいどうしたものかなど悩みながら過ごしていました。そこで当事者として、自分だったら障がい者の就労支援ができるのではないかと考えるようになりました。「たぶん豆塚さんの当事者性というところに共感する人はたくさんいるだ

ろうから、会社組織よりNPOのほうがうまくいくと思う」と言われ、NPO 法人を立ち上げることを決心しました。

NPO 活動では、今まで頑張ってきたことがみんなに響く充実感があり、ようやく自分が社会人になれたと思った瞬間でした。社会人になるというのは、自立してお金を稼ぐことではなく、人に頼って応援してもらうことだと思い、「これが社会なんだ!」と実感しました。

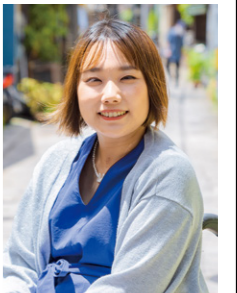
障がい者が活躍する文化の拠点の創造

今は障がい者や難病のある方など、普通に働きたいけれど、働きにくい方を対象にしたオンラインライタースクールを立ち上げ、奮闘しています。コロナ禍にリモートワークが普及し始め、東京からいろいろ仕事ができるようになると、「リモートワークって、実は障がい者が働くのにピッタリなんじゃないか」と気づいたのです。そして、特に適しているのはライターの仕事だと思いました。どんな仕事でもライティングの技術は生かされるし、自分自身を理解し、しっかり説明できるようになるからです。

その先には、この別府という街を大分の文化の拠点にしたいと考えています。せっかくよい街で、面白い文化もたくさんあるので、もっと文化を豊かに、大切にできるようになればと思っています。また、アウトサイダーアートもこの街なら受け入れてくれる、歴史的に見てももともと文化を担ってきたのが障がい者という背景もあり、ここ別府でその役割を担えたらと思い、それが私の最終ゴールです。

まめつが
豆塚 エリ

詩人・エッセイスト。大分県在住。16歳のときに自殺未遂を経験し、頭髄を損傷、車いす生活を送る。2013(平成25)年にこんぺいとう出版を立ち上げ、自費出版を開始。2016年、太宰治賞最終候補に選出。NHKハートネットTV コメンテーターなども務める。2022(令和4)年に出版したエッセイ「しにたい気持ちが消えるまで」が大きな反響を呼ぶ。現在は、執筆活動や自殺予防の講演、NPO 法人理事長としても活動中。



撮影：富高 優里奈

『不登校』が問いかけるもの： 社会へのメッセージを受け取る

小児科専門医
子どものこころ専門医
山口 有紗

“不登校”の多様さ

「がっこうにいていなくて、しょうがいがあるかどうか、しらべにきました」

児童精神科の診察室での最初の診察で、あるお母さんが伝えてくれた言葉です。私は言葉を失いました。「学校に行っていない」このお母さんは、どのような気持ちで日々を過ごしていたのだろう、どんな言葉や視線を周囲の人から受けていたのだろうと思うと、(医療機関や診断名の功罪も含めて) いたたまれない気持ちになりました。

また、学校に行かない状態に対して様々な思いを抱きながらも、お子さんとともに、その曖昧で行きつ戻りつする状況を診断名や原因探しに過剰にとらわれることなく受け止めている保護者や先生方、そしてその中で、甕にゆっくりと水が溜まるように、少しずつ心に潤いを取り戻していくお子さんにも何度も出会いました。

かくいう私自身も、高校は出ていません。学校に行かない仲間たちと過ごした過去や、これまでたくさんのお子さんやご家族のお話を伺ってきた経験から、「不登校」という状況やその背景がいかにも多様であるかを強く感じています。

小学校では不登校で中学からは学校に行き始めたあるお母さんは「みんな受験でピリピリしていて、学校の対人関係がしんどくて、家でも暴力があって、つらかった。だから勉強だけしてようって思った。それで、小学校は不登校だったけど、中学は皆勤賞だった」

と教えてくれました。問題は、不登校を解決するだけではちっとも解決していないのかもしれない。

社会のあり方への問いかけ

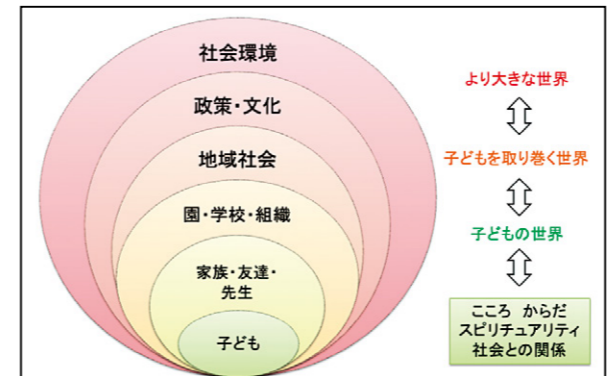
文部科学省の統計によれば、2022（令和4）年度の国立、公立、私立の小・中学校における不登校の児童・生徒数は過去最多となる30万人近くに達し、増加の一途をたどっています。これは、40人に1人が不登校状態にあることを意味します。このような現状を前に、不登校の子どもに対して、その子の特徴や傷つき(神経発達特性や精神的な不調、いじめなど)に焦点をあて、その特徴に合わせた支援や心のケアに力を注いで不登校を減らそうとすることが主流となっています。もちろん、それらは非常に重要なことです。もしその子が現在困っていることがあれば、適切にアセスメントを行い、明確な障壁があれば取り除き、心の不調がある場合はそれに対処することが必要です。

一方で、果たしてそれは根本的な解決になるのだろうか、と疑問に思うこともあります。実際に、はっきりした原因がよくわからないまま、学校に行けばそれなりに充実して過ごしているようであるけれども、なんだか学校への足取りが重く、学校にいととも疲れてしまう子どもたちも多いように思います。つまり、子どもたちの不登校が増えているのは(そしてそれが新型コロナウイルス感染症の流行後にさらに顕在化したのには)、現代

が、子どもが過ごす学校のあり方と、さらにはこの社会のあり方を、ともによりよくしていく時期であることのサインであるかもしれないと思うのです。

エコロジカルモデル

子どもたちは、家族、友達、先生、学校、地域社会、政策や文化、さらには社会的環境など、様々な層の影響を受けています(下図参照)。これらの層が相互に作用し合い、子どもに影響を与えています。このような視点を「エコロジカルモデル」と呼ぶことがあります。不登校という文脈で考えると、子ども自身の身体的・精神的な状態、神経発達特性が学校生活に影響を与えるだけでなく、家族や学校に対する考え方、友達や先生との関係、さらには「学校」という場自体の雰囲気やカリキュラム、地域との関わり方、自治体や国の教育政策、子どもの学びの権利に対する認識、そして社会的な出来事(新型コロナウイルス感染症、デジタル化、戦争、気候変動など)も、複雑に絡み合って子どもの不登校に影響を与えているのです。



▲図：子どもを取り巻くエコロジカルモデル

少し話が壮大だと感じるかもしれませんが。けれども、不登校のお子さんに出会えば会うほどに、「不登校」に向き合うことというのは、子どもの症状や状態を改善すること以上のものだと思えてならないのです。

システム全体をケアすること

家族療法の概念には、「Identified Patient (アイデンティファイド・ペイシェント)」というのがあります。これは、子どもが心の不調を表す際、その子どもが周囲の問題を代わりに体現していると捉え、そのシステム全体をケアする必要があるという考え方です。「不登校」の子どもたちは、社会のゆがみを代弁し、身をもってそのサインを出してくれています。根本的に治療すべきは、不登校という状態をその子どもに強いた社会のゆがみそのものであることを忘れてはならないと思います。

「不登校への対応」というマニュアルが多く出ている今だからこそ、その状態をなくそうとする前に、少し立ち止まり、そのお子さんの目線から見える世界と一緒に眺めてみることも大切なかもしれません。

著者プロフィール



山口 有紗 (やまぐち ありさ)
小児科専門医・子どものこころ専門医。公衆衛生学修士。
高校中退後、大学入学資格検定に合格し、立命館大学国際関係学部を卒業。
山口大学医学部に編入し、医師免許を取得。
東京大学医学部附属病院などを経て、現在は子どもの虐待防止センターに所属し、児童相談所などで相談業務に従事している。
国立成育医療研究センター臨床研究員。
こども家庭庁アドバイザー。
近著に『子どものウェルビーイングとひびきあう』がある。



子どもの心に寄り添う ～検察庁での取り組み～

大阪地方検察庁
検事
指澤 慶子

記憶に残る原風景

幼少時期を東南アジアで過ごした私は、自分と変わらぬ年齢の子どもたちが、大人に連れられて一緒に物乞いをする姿や、信号待ちで停車した車に、ブーゲンビリアの花束を持って駆け寄り、車の窓ガラスをたたき花売りの子どもたちを目にしては、思わず目を伏せていました。私が子どもたちのための仕事をしたいと思った、原風景です。

日本に帰国し、大学生になると、サークルで児童養護施設の子どもの学習ボランティアをするようになりました。同時に、留学生と交流するサークルにも所属していた私は、留学生を児童養護施設に案内することもありました。留学生たちは、豊かなはずの日本で、なぜこんなにたくさん子どもたちが施設で暮らさないといけないのか、皆、疑問を口にしていました。

検察庁での取り組み

あれから20年以上が経ちました。

児童虐待の通告件数は増加の一途をたどり、2003(平成15)年2月1日現在、3万2870人だった社会的養護の対象児童数(里親委託児童数及び児童養護施設委託児童数合計*)は、2023(令和5)年2月1日現在においても3万813人を数え、減少する18歳未満人口*との比率では、むしろ増加しているともいえます。

増加する児童虐待事案に対し、検察庁でも、子どもの声を拾い、子どもの心に寄り添うための様々な仕組みを工夫しておりますのでその一例をご紹介します。

従前、児童虐待事案においては、検察・警察・児童相談所の職員が、子どもからそれぞれの立場で必要な聴取を行っていました。しかし、子どもの負担を軽減するとの観点からすると、聴取回数

は少ないほうが望ましく、また、子どもは、認知・記憶・表現といった能力が未発達で、暗示・誘導の影響を受けやすいという特性があることから、聴取方法や回数についての留意が必要であるとの指摘を踏まえ、この種の事案については、検察・警察・児童相談所との更なる連携の強化が必要と考えられました。

そして、平成27年10月28日、最高検察庁、警察庁、厚生労働省において、子どもの負担軽減及び子どもの供述の信用性確保の観点から、児童虐待事案については、検察・警察・児童相談所が更に連携を強化し、三機関の担当者が協議し、そのうちの代表者が子どもから聴取するなどといった取り組み(これを「代表者聴取」と呼んでいます。「協同面接」と呼ばれることもあります)を進めていこうということになりました。

代表者聴取とは？

この「代表者聴取」ですが、検察・警察・児童相談所といった関係機関のうち、代表者一人が関係機関の代表として、録音録画のもと、子どもの供述特性を踏まえ、暗示・誘導的な質問を排した司法面接的手法を用いて子どもから聴取をし、その余の機関は、別室でその状況をモニタリングして把握するなどの方法により実施します。



▲代表者聴取の場所



▲モニター室(別室)

これにより、子どもが一度被害状況を話せば、その情報が各機関に共有されるため、繰り返しての聴取の必要がなく、子どもの負担軽減に資するものとなります。

司法面接的手法を用いた聴取は、全国で広く行われるようになりましたが、刑事裁判のルールを定めている刑事訴訟法では、従来、司法面接的手法を用いた聴取が行われた場合でも、刑事裁判で争われると、その聴取結果を記録した録音録画記録媒体は証拠として使用することが認められないのが原則であり、一定の厳格な要件を満たさない限り、改めて子どもが証人として一から証言せざるを得ず、子どもの負担の軽減を図る上で不十分でした。

そこで、令和5年12月の刑事訴訟法改正によって、子どもの聴取結果を記録した録音録画記録媒体を、一定の条件のもとで証拠として提出するための新たなルールが定められました。

具体的には、子どもの聴取結果を記録した録音録画記録媒体について、その供述が、子どもの不安や緊張を緩和するなどの措置や、誘導をできる限り避けるなどの措置が特に採られた状況のもとにされたと認められる場合であることに加え、「聴取に至るまでの状況その他の事情を考慮し相当と認めるとき」に証拠として提出できることとなったのです。

この「聴取に至るまでの状況その他の事情を考慮し相当と認めるとき」という要件は、例えば、聴取前に、他の大人などから、暗示・誘導的な質問をされ、その影響を受けて子どもの記憶が大幅に変容するなどしていた場合、その供述の信用性

の判断を誤らせる危険があるので、証拠として使用することは相当でないと考えられたことから設けられたものです。

先生方へのメッセージ

以上を踏まえてのお願いですが、学校の先生方におかれましては、子どもからいろいろな話を聞かれる際、これは犯罪の被害に遭ったのではないかと思われるような事実を打ち明けられた場合には、子どもの記憶が変容しないように、詳細を尋ねたりせず、自発的な子どもの話を聴くにとどめ、そのやり取りを正確にメモに残すなどご留意いただくとともに、速やかに児童相談所や警察等に情報提供していただくようお願いいたします。これにより、必要に応じ「代表者聴取」が迅速かつ適切に実施され、その後の子どもの負担軽減につながっていくことになるからです。

子どもたちの声が正確に、刑事裁判の場にまで届くよう、ご理解とご協力をお願いしたいと存じます。

*1 厚生労働省「児童養護施設入所児童等調査の概要(平成15年2月1日現在)」、子ども家庭庁「児童養護施設入所児童等調査の概要(令和5年2月1日現在)」

*2 各年10月1日現在人口の統計である「人口推計」のうち、18歳未満人口の合計は、平成15年10月1日現在2195万3000人である一方、令和5年10月1日現在1742万4000人となる(総務省統計局ホームページ「人口推計」2023年の統計表及び2003年の統計表から計算)

著者プロフィール



指澤 慶子(さしざわ けいこ)

大阪地方検察庁・検事。
臨床心理士、公認心理師、社会福祉士。家庭裁判所調査官や児童相談所の児童福祉司などを経て、ロースクールに入学し、司法試験に合格、検事任官。

不登校を未然に防ぐための取り組みと情報の共有

～包括的生徒指導の実践と校内サポートルーム（KSR）の運営～

香川県高松市立山田中学校 校長 溝渕 浩二

包括的生徒指導の実践

不登校を未然に防ぐためには、「魅力ある学級づくり」とともに生徒の社会性を高める必要があると考え、本校が実践しているその取り組みを紹介します。

①学校環境適応感尺度「アセス」*¹を活用した学級づくり・教育相談

年度の早い段階で学校環境適応感尺度「アセス」を実施し、生徒の傾向を把握した上で安全・安心な居場所となるような学級づくりを進めています。また、個人データを参考に学級担任が生徒一人ひとりと教育相談を実施しました。不適応傾向にある生徒については、ちょっとした変化を見逃さず、声かけ等をしていくようにしています。

②ピア・サポート活動*²を通じた仲間づくり

仲間づくりを目指したピア・サポート活動の実践にあたり、現職教育で理論研修を行いました。社会性や人格形成の土台としてSEL（社会性と情動の学習）が果たす重要性やピア・サポート活動がSELの要素であることを理解した上で、活動がどのような意味をもっているかを認識しながら指導ができるようにしています。

③「生活記録」の活用やSC*³、SSW*⁴によるカウンセリング

生徒が発するSOSをキャッチする一つ的手段として、生徒が毎日提出する「生活記録」があります。ちょっとした変化や気になる記述があれば声かけ等を行っています。また、SCやSSWに面談の要望があればカウンセリングを実施し、必要な情報を学級担任、教育相談担当等と共有し、対応をしています。

校内サポートルーム（以下、KSR）の運営

不登校傾向のある生徒の校内での居場所として、KSRを運営しています。KSRまでの動線を考え、他の生徒の目につかずに入室できる場所に設置し、入り口から直接部屋の中が見えないようにも配慮し、安心して通室できるようにしています。学力

保障として一人1台端末を活用し、教室の授業を見ることができるようになっていますが、通室している生徒は静かに自分のペースで学習したいという希望が多く、自習が主



となっています。また、通室している生徒は定期的にSCやSSWと面談をし、その情報は個別の支援計画に反映されています。

今後、進めたい取り組み

不登校生徒に対し、学校は教育委員会が設置する教育支援センター等、公的機関と連携を密に図っていますが、中にはフリースクール等の民間の施設に居場所を見つけている生徒もいます。今後、様々な生徒に対応するため、民間施設との連携を深めていきたいと考えています。例えば週5日の登校日のうち、2日は学校に、3日はフリースクールに通うといった柔軟な対応もあり得るのではないかと考えています。

*¹ 6観点で構成され、子どもたちの学校における適応感を多面的に測定する。

*² 仲間によるサポート活動のこと。

*³ スクール・カウンセラー。

*⁴ スクール・ソーシャル・ワーカー。

著者プロフィール



溝渕 浩二（みぞぶち こうじ）

1986（昭和61）年、高松市の中学校理科教員として採用される。2011（平成23）年に山田中教頭、2014（平成26）年より指導主事として香川県教育委員会東部教育事務所に着任。2018（平成30）年に男木中学校長、2021（令和3）年より現職。

アンケートのお願い

右の二次元コードより回答いただいた方には、ご希望の機関誌の最新号をお届けします。



教育情報 No.26、

日文 教授用資料
令和7年（2025年）2月10日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261
FAX: 06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33790

日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F-B
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690